『ONE BOOK ONE LIFE』別冊号1986年9月10日第１号発行

ろくおん通信

No. 115

発行日　2001年1月15日
発　行　盲人情報文化センター
録音製作係

音声訳を考える

デイジーの普及で録音上の注意点は

デイジー図書を作る時には元の録音レベルが大変重要になります。カセットテープからデジタルデータに変換する時に、録音レベルが低すぎるといろいろとトラブルが発生することになります。

トラブルその１　フレーズが切れずデイジーの編集ができない。

デイジーでは無音部分が一定時間（普通は0.40秒以上に設定。）以上ある場合フレーズとして切っていきます。元の録音したレベルが低いと、音量を上げてもテープヒスも大きくなり、音として認識してしまいフレーズの切り出しができなくなります。

トラブルその２　出だしの頭の部分が切れてしまう。

（特に無声化する音の出だしはよく切れる）

デイジーでは瞬時に該当の項目に飛ぶことができるので、目次の項目にあわせて本文を分けていきますが、この時に、項目の出だしの言葉が切れてしまうことがあります。これは、デイジーでは無音状態から音が出る瞬間にフレーズが切られますが、このとき録音レベルが低すぎると音声訳者の出だしの声も雑音と見なされて切れてしまうからです。通して聞く場合問題はありませんが、たまたまその項目に飛んだりした場合、出だしの部分がおかしくなります。これはデイジーの編集で直すこともできますが、録音レベルが低すぎるとこうした問題が発生しやすくなりますので注意しましょう。

録音のレベルの目安はカセットでは－４に常時届いている程度に、デジタル録音では常時－６に届いている程度に録音してください。

録音レベルが適切でもバックに「ジィー」といった電気的な雑音が入っているのもフレーズが切れないのでデイジーの編集で困ることになります。録音レベルが適正でや雑音のないテープを最初からつくるよう心がけましょう。

訂正の時も録音レベルはしっかり合わせてください。訂正個所のレベルが高すぎたり低すぎるとトラブルの原因になります。

読み方で、突然大きな声を出したり、声を小さくしたりするのも禁物です。レベルが大きすぎるとデータが壊れることがあります。声を張り上げるような読み方は禁物です。

目次や索引の読み方に注意

デイジー図書では目次の項目は、「1－1、▼■◎■、○○ページ」までを編集で1フレーズにしています。目次を読むときに、できるだけ、「1－1、▼■◎■、○○ページ」までを一つのフレーズとして読むようにしましょう。また、索引を読む場合も同じで、索引の項目とページまでは同じフレーズとして読み、項目と項目との間はしっかりとります。そうすることでデイジーにする時に項目とページを1フレーズにすることができ編集がやりやすくなります。

つづく

「練習問題」はしばらく休みます

これまで『ろくおん通信』では処理の必要な例文を「練習問題」として取り上げてきましたが、しばらく処理の練習問題の掲載は中止します。処理の練習は、読み手と聞き手に別れ、必ず例文を知らないで聞くことが必要です。そうすることで聞き手にわかるように処理する方法が実感できるはずです。文章でわかったような気分になるのは禁物です。

お願い *グループでよい練習文があれば係（清水）までお送り下さい。また、後日、取り上げていきたいと思います。*

先月の例文の処理例

「カゲ」の話

最初に「かげ」にはサツエイの「エイ」とイントヨウの「イン」と補足し、以下は、エイノカゲ、インノカゲと読む。
「蔭」はクサカンムリニインノカゲ、「鑑」はカネヘンニ、カンシュウノカンなどと

補足する。

以下は説明を入れる箇所に網をかけています。

常用漢字でカゲという訓を持つのは、影と陰である。二つは同源であるが、意味によって表記を変える。が、カゲという語自体が多義的なので、使い分けの線引きはそんなに簡単ではない。新聞では、影は“物の形・光”、陰は“隠れて見えない、光のあたらないところ”ということで使い分けをしている。

「月影の澄みわたるかな天の原吹きはらふ夜半のあらしに」（『新古今集』大納言経信）。夜中に吹く風に雲が吹っ飛んで、月影が澄み渡ってこうこうと輝いているという、この「月影」は月の光そのものの意味。同様に、「星影」は星の光、「火影」は灯火の光。このように光を指して言うカゲには、影を使う。

影には水面や鏡に映った姿形の意味もある。「照る月も影水底にうつりけり似たる物なき恋もするかな」（『拾遺集』紀貫之）。月だって水に映ってコピーの姿が見られるのに、全くオリジナルな、比べる物のない恋をするものだよ。“私の恋は、ありふれた人並みの恋でないのだ”と売り込んで気を引こうという心である。

「面影」は、記憶に残っている顔や姿。つまりは、心に浮かぶイメージ。また、「母の面影を残している娘」のように、似た印象という意味にも使われる。鏡や水面に映る影と同様、実物でないから一種のコピーだ。この辺から、影には、比喩的にホンモノに似せて作ったものというような意味が添えられ、「影武者」のような語も成立する。

「夢よりもはかなきものは陽炎のほのかに見えし影にぞありける」（『拾遺集』よみ人しらず）。この影は、人影。恋しい人の姿を遠くから見かけたのだろう。ゆらゆら揺れる陽炎のような、ほのかに見えたその姿は、夢よりももっとはかないと嘆く。影は、このように姿形そのものを指す場合もある。

あはれ花びらながれ　をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ　うららかの跫音空にながれ
をりふしに瞳をあげて　翳りなきみ寺の甍をすぎゆくなり
み寺の甍みどりにうるほひ
雨々に　風鐸のすがたしづかなれば
ひとりなる　わが身の影をあゆまする甃のうへ

（三好達治『測量船』所収「甃のうへ」＝引用は筑摩書房・現代文学大系『萩原朔太郎・三好達治・西脇順三郎集』から）

しきりと花びらの流れる寺域の光景を描いた美しい詩である。作品の末尾の「わが身の影」は、光が物体に遮られたとき、光と反対側にできる暗い像、つまりは影法師のことである。

「花のちる木のしたかげはを（お）のづからそめぬさくらの衣をぞきる」（『千載集』藤原仲実）。花びらの降り注ぐ桜の木の下にいると、その花の色によって、別段染め上げたわけでもないのに、自然に桜襲を着た感じになる。「木のしたかげ」の「かげ」は陰。物に遮られて光の当たらないところである。

陰には、物などによって人の視線の届かない場所、という意味もある。同じ「島カゲ」でも、「島影」なら「島影が見える」のように島の姿のこと、「島陰」だと「船が島陰に入って見えなくなる」のように目で見られない場所の意味になる。同様に、湖面に映る山の姿は「山影」、夕陽が沈む所は「山陰」と書き分ける。

陰には、「陰口をきく」「陰に回って悪口を言う」のように、その人の居合わせていない場所という意味もある。こんな人物は要注意だが、自分のために陰で祈ってくれたり、援助をしてくれたりする人はありがたい。人が物事に成就し得るのは、そうした庇護者の目に見えない力添えの「お陰」ではあるまいか。「お陰」は古くは「御蔭」と書かれることが多かった。「蔭」は表外字、また「御」をオと読むのは表外訓だから、新聞では「お陰」と書くことになる。

ところで、女性には毎日欠かせない「鏡」。そのカガミのカガはカゲの母音交代形で、カゲより古い語形とされる。ミは“見”だから、「鏡」とはすなわち「影見」で、文字通り顔や姿を映して見る道具というわけだ。「武士のかがみ」などと使う「かがみ」は、漢字では模範と書かれる。「（鏡によって形を整えることから）ものごとの規範。手本」と『小学館古語大辞典』にある。

「鏡」を動詞化したのが「かんがみる」だ。漢字で書くと「顧みる」。“先例と照らし合わせて考える”が語義。「考える」と意味が近く、一見縁戚関係がありそうだが、「考える」の古形「考ふ」はアリカ、スミカなどの カ（所）にムカフが結びついてできた語らしく、別の由来。「かんがみる」の古形は「かがみる」である。

天声人語

①ひらがなで「あじさい」　② 漢字シヨウカにあじさいとルビ　③ムラサキニタイヨウノヨウハナ、シヨウカ　④ 紫陽花はシヨウカと読む　⑤旧仮名遣いで「あぢさゐ」

アジサイ。六月の花。ことしは足柄平野に広がる神奈川県開成町で、この花をめでた。水田地帯の十七㌶に、丹精込めた五千株がある。▼水の豊かな町だ。アユで知られる酒匂川（さがわ）から引いた水路が縦横に通じ、そのほとりにアジサイが咲く。水が大好きな花に、この暮らしはうれしいだろう。こんもりと球状に咲く「手まり」の寄系統がそろそろ終わって、いま、ピンクというか赤系統の花の日々。まもなくガクアジサイの季節になるそうだ▼俵万智の歌に<思いきり愛されたくて駆けてゆく六月、サンダル、あじさいの花>。いかにも初々しく、紫陽花という表記が軽やかだ。でも、寺山修司のつぎの歌は違う。<森駈けてきてほてりたるわが頬（ほお）をうづめむとするに紫陽花（あじさい）くらし>。②紫陽花これも初々しいけれど、やはり③紫陽花と書くのがふさわしい▼紫陽花（④紫陽花）とは、白居易（楽天）の命名だ。俗界を遠く離れた山中に、名も知らぬ花が咲いている。紫色で、なんともいえぬよい香りがする。だから「紫陽花（④紫陽花）」と名付けよう、と詩にある。万葉集にも詠まれたアジサイに、平安のころ、日本でも紫陽花（④紫陽花）の字があてられた▼ただし白居易の紫陽花（④紫陽花）は、正確にはいまのアジサイではなかった。だいいち、アジサイは決して彼の詩のように香り高くはない。この場合の「紫陽花（④紫陽花）」とは、たとえばバルカン地方原産のライラックではなかったか、などと推測されている。紫の、たしかに芳香をもつ花である▼来歴はともかく、いまの私たちにとって紫陽花（④紫陽花）もあじさいも、アジサイだ。もう一つ　<あぢさゐや真水の如（しご）き色つらね>という高木晴子（はるし）子の句も思い出す。そう、⑤紫陽花にも雰囲気がある▼梅雨なのに、とくに本州はまだ梅雨らしくない。開成町ではきのうも、役場の人が自治会の消防ポンプを借りて、水路の水をふんだんにアジサイに見舞った。

二通りの読みがあって意味が異なるもの（62）

仮借	カシャ　或語を表す漢字がない場合その後の意味とは無関係の別の同音の漢字を借りて表す方法 カシャク　見逃すこと	下手	シモテ　河の下流の方。 シタテ　下の方　将棋など劣る方の指し手 ヘタ　技術などうまくないこと
称える	トナエル　呼ぶ。名付ける。 タタエル　誉める。称揚する。	開口	カイコウ　ものを言い始めること アクチ（アグチ）　足袋、沓などの足を入れる口。

今回から校正作業についてシリーズで取り上げます。第１回は校正作業の４つのポイントをあげました。以下、それぞれのポイントについて説明していく予定です。校正者だけでなく、音声訳者も確認の意味でお読み下さい。

第１回

校正のチェックポイント

録音図書の校正は誤読のチェックは勿論ですが、その他にもいろいろとチェックしなければならないことがあります。特に２校でチェックもれがたくさんあると、デイジー編集の手間もかかりいい図書を作るのが困難になります。

訂正の済んだMOはそのままカセットテープのマスターになります。デイジー編集してCDとして提供されるものは別の形になります。そのつもりでチェックして下さい。

以下必要なチェックポイントを上げますので校正表と合わせて確認してください。

１．全体の構成　　決められた約束が守られているか

・１巻はじめの枠（テープ全○巻はメモしておいて最終巻の時にチェックして下さい。）

・各巻はじめと終わりの枠

・Ａ面の終わりとＢ面のはじめが合っているか

・B面の終わりがA面のはじめよりはみ出していないか
・最終巻の終わりの枠

2．読みについて
・誤読（漢字、人名、地名、外国語など）
・二通り以上の読み方がある熟語の読みは特別な場合をのぞいて1冊の本では統一されていることが必要です。
・アクセントは他の語と間違えるときは校正表の上の欄に（読み手のクセのようなものは下の欄に書いて今後の参考にしてもらってください。）

3．処理について
・凡例は適切か
・凡例通りに処理がされているか
・注、図、表などの入り方終わり方は約束通りに、かつ、全巻統一されているか
・注、図、表など、文章以外のものが本文中の適切な所に挿入されているか。その説明が適切か
・省略する図表などについての断りが適切に入っているか

4．音
・ボリュームは揃っているか
・雑音はないか
・不自然な間はないか

つづく

近ごろ気になる放送用語
NHKことばのハンドブックより

Q.
サッカーのファンのことを「サポーター」というふうに発音するのをよく耳にしますが。

A.
共通語では、ハシ（橋・端）とハシ（箸）とを発音の上で区別しています。この区別ほどははっきりしていませんが、カタカナ語の一部に新しい区別がみられます。

最近の調査では、サッカーのファンを「サポーター」、腕などに巻くものを「サポーター」というふうに発音しわけている人が多いことがわかっています。ほかに、「バッテリー（＝電池）」と「バッテリー（＝ピッチャーとキャ
「トレーナー（＝服）」と「トレーナー（＝調教師）」などのように発音しわけている人が出てきているようです。

実際の放送でどのような発音をしたらよいのか迷ったときには、１３年ぶりに大改訂された『日本語発音アクセント辞典新版』（４月末出版）を参考にしてください。もっとも、「カレシ（＝彼氏）」という発音は認めていませんが。

「十五分」のアクセント

Q.

最近、「十五分」「十五日」のアクセントが変わってきたようですが。

A.

そのとおりです。もともと、共通語のアクセントでは、「十五分」はジューゴフン、
「十五日」はジューゴニチのように、頭型のアクセントで発音していましたが、それを最近は、「ジューゴフン、ジューゴニチ」のように、助数詞（分や日）の前のところにアクセントが来るようになりました。

それには、理由があります。例えば、「十一分」から「十九分」のアクセントを考えると、「十五分」を例外として、すべて助数詞「フン」の前にアクセントが来ているからです。ただし、ジューイップン、ジューサンプン、ジューキューフンのように、フンの前に特殊拍（ッ、ン、ーなど）があれば、アクセントは一拍前にずれます。

このように、例外の「十五分」の頭高アクセントが、他の仲間のアクセントの形に引きずられた結果、ジューゴフンが登場したと推測されます。ただし、現在のところ、放送ではジューゴフンと言ってほしいのですが。

[放送文化研究所（放送研究）用語研究班]

上手な家庭録音のすすめ　第3回

録音機やマイクをどう設置するか

今度は録音機を家庭のどこにどのように設置（セット）するかを考えます。どのように設置するかでずいぶんと音も変わってきます。まず、

①部屋の選び方（反射する部屋は向かない）

録音した音が風呂場で読んだように響いて録音されることがありますが、これは洋間のように周りの壁が音を反射する部屋で録音するとおこります。反射音が多いとたいへん聞きづらい録音図書になってしまいます。部屋は周りに反射する壁のない部屋が理想ですが、そんなわけにはいきませんてので、声が反射しないようにカーテンを閉めたり、タオルや座布団などで音を反射するものを覆うとよくなります。

②遮音

家庭で録音をはじめると外の音（自動車、飛行機など）や家庭内の音（電話、冷蔵庫、テレビなど）が入ってきます。外の音ができるだけ入らないように窓があれば閉めます。録音する机のまわりに障壁をたてるとさらに外の音を防ぐことができます。障壁をたてる場合は、柔らかい布などで周りを覆います。座布団でも周りに立てて置くことでも、反射音を減らし、音声をクリアーに録音することができます。

③録音機とマイクのセット

録音機とマイクを同じ机の上にセットするといろいろな雑音を録音してしまいます。これは機械の回転音や操作音などが、録音機→机→マイク立て→マイクと伝わり録音されるわけです。録音機は必ず机とは違う所にセットしましょう。また、マイクもマイクスタンドを使用するより、少し太めのロープなどで天井からつるすようにすれば、机の上でおこる音をマイクスタンドを通して拾うことがなくなり雑音を減らすことができます。　　つづく

利用者から製作依頼を受けている原本です

『自分をどう表現するか』佐藤綾子著 〈社会学〉
『聖霊ににによるバプテスト』阿部祐四郎著 〈キリスト教〉
『歌集 茜にもゆる』 林彰子著〈詩歌〉
『ホームトレーニング100』 平山隆一著〈スポーツ〉
『信仰と生活シリーズ愛されて生きる』 泉キリ江著 〈宗教〉
『関節リュウマチの病人さんのために』 〈医学〉

以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音についてのチェックと共に、必要があれば録音技術のアドバイスをさせていただきます。

今回引き受けて頂いた原本とグループ

『21世紀の風』 大徳寺昭輝著 〈宗教〉	ICCB
『氷室 歳時記』阿部裕四郎著〈キリスト教〉	〃
『ニードリッパー スーパー怪奇劇場』菊池秀行著	〃
『カラス、どこがわるい！？』 樋口広芳著	〃
『マーフィー 「お金に不自由しない人生」55の人生』 マーフィー理論研究会編〈論理学〉	グループぽっぽ
『希望の国のエクソダス』村上龍著〈小説〉	〃